

古來發句集

わが世尊に十大弟子とて、やごとなき羅漢達のおはしけるにも、智慧第一の何、神通第一の何とかやいふて、その一ツく修し得たる徳のおはしける。また孔子の十哲とて、かしこき人くのいまぞかりけるにも、徳行は誰、言語には誰と、己くが學び得し道の有けるとぞ。芭蕉翁の風雅の門人にも、其角はその句躰花やかに、丈草は靜に、野坡は輕く、土芳はあだに、許六ははたらきあり、正秀は奇に、支考はほどけたりなど、去來の評ありし如く、己が好たる句躰の一すぢによりて、かた糸のかたくに習ひ得たるなるべし。これみな蕉翁一人の教より出て、かくその句躰のかはりたる、これや世尊の十大弟子、孔子の十哲のたぐひなるべし。さればその門人多かる中にも、關東に其角風雪といひ、關西に去來丈草とて、難弟難兄の上足なれども、其角風雪は風雅を弘むるを業とし、もはら名利の境に遊べば、またその流れを汲む輩も多くて、其角に五元集、風雪に玄峰集などいへる家の集ありて世につたふ。さるを去來丈草は、蕉翁の直指のむねをあやまらず、風雅の名利を深くいとひて、たゞ拈華微笑のころをよく傳へて、一紙の傳書をも著さず、一人の門人をもとめざれば、ましてその發句

を書集べき人もなし。この寥々たるこそ蕉翁の風雅の骨髓たるべけれ。予としごろ此二人の風雅をしたひて嵯峨野々春に遊びては、梢にちかき嵐山と吟じて落柿舎にむかしをかたり、粟津の浦の秋の月にうかれては、秋の廻るや原の菴と詠て、岡の堂のすたれたるをなげく。かしこにすし、爰に思ひ出て、書あつめたる發句を久しく衣囊の底にかくし置しを、このごろ嵯峨の重厚粟津の魯江の二法師、寫んことをあながちにこひもとめぬるに見せしむ。かならずや窓の外へ出して、いたづらに古人の心に背く事なかれ。

明和八年命のちこ月东山 嵯峨里

五外 嵯峨里
嵯峨里 記

去來姓は向井、名は平次郎、號義焉と。肥前長崎の人なり。彼地の聖堂祭酒の氏族にして、世々儒を業とす。博く書をよみ、天文曆學をきわめ、詩歌を翫ぶ。また沈勇にして猛猪を刺す。都にありて何がしの殿下に仕へ奉る。宦袴の暇には芭蕉翁に隨ひて誹諧の風雅を學ぶ。鴨川の東聖護院村に住る。また嵯峨の小倉山の麓に別莊をいとなみて行通ふ。ある秋のころ庭に柿の落しを見て、その居を落柿舎と名づく。菊亭内府公よりその三字を賜ふ。寶永元年の秋九月十日没す。墓は東山眞如堂にあり。今の落柿舎は明和のころ、重厚再興して今存せり。

（落柿舎は天龍寺附近なるべし。重厚再興のものは小倉山の麓にて「弘源寺の跡」といへる所、現代のものは弘化の頃石外といへるものの造りしなりと。他石）

吉本漢句集

春

元日や家に譲りの太刀帯ん
元日や土つかふだる顔もせず
褰形では逢じいふても花の春
商人の空音ゆたかや伊勢の春
蓬萊にかけてかざるや老の袖
萬歳や左右にひらいて松の陰
月雪のためにもしたし門の松
獨り寐もよき宿とらん初子の日
わか菜つみ敷ものやらうさん悵
蜨蝶にてある蝶に

うぐひすの朝日まつ音や谷の底
鶯や雀よけ 行枝 う つり

(この句「平安二十歌仙」無
村の序文に引ける「一紙兩
筆の書」といへるものによ
れば、芭蕉の句なるが如き
も、「藤の實」には去來と明
記あり)

黃鸝のまだ啼まひか今朝の雪
風叩が春の景色見んと舟に乘
て出けるに

うぐひすか人の眞似るか梅が崎
瘦はてゝ香にさく梅のおもひかな
上蒨の山莊にましけるに
候し侍りて

梅が香や山路分入る犬のまね
高沙や海より暮てうめの花
五六本よりてしだるゝ柳かな
應くで人をすかせるやなきかな
青柳のたゝいて遊ぶ板戸かな
姑の氣に入る人は柳かな

たのしさよ闇のあけくの臘月
鉢たゝき來ぬ夜となれば臙なり

洛よりの文の返しに
〔炭俵〕には「洛よりの文の
はしに」とあり

臘月一足づゝにわかれかな
弟魯町故郷へ歸りけるに

手をはなつ中に落けり臘月
呼出しに來てはうかすや猫の戀
うき友にかまれて猫の空ながめ
竹原や二疋あれこむ猫のこひ
いくすべり骨折岸の蛙かな
田の畔や虹を背負てなく蛙
一畔はしばし啼やむ蛙かな
溜つぽもひしけと雉子のほろゝかな
雞のおかしがらんきじの雛
歸るとあつまる雁よ海のはた
遊ぶとも行ともしらぬ燕かな
(この句は歸燕にて、秋季な
らん)

山雀の高音になるも別かな
振舞や下座に直る去年の雛
上り帆の淡路はなれぬ沙干哉
うごくとも見へで畑うつ男かな

〔贗野〕に下五を「麓かな」とす。

陽炎や足もとにつく戻り駕
神鳴や一むら雨のさへかへり
春風に吹出されけり水の胡蘆

呂九道悼

踏みやす雪も名残や野邊の供

丈草を哭す。

凡十年の笑は三年の恨に化し、
その恨は百年の悲を生ず。惜
しみて猶名残おしく、此一
句を手向て、來しかた行すゑ
を語り侍るのみ。

〔此文は『風俗文選』所載「丈
草誄」の末段也。〕

なき名きく春や三とせの生別
花をまつ日數によごすころもかな

西行の詞をかりて類歌の詠を
難す。疎きも人は折にこそよ
れ。使は來たり馬に鞍おけ。

供觸も折にこそよれ初ざくら

花守や白き頭をつき合せ

知る人にあはじくと花見哉

何事ぞ花見る人の長刀

咲花にうき世の人や神せより

よし野山またちる方に花めぐり

小袖ほす尻なつかしや窓の花

一昨日はあの山こへつ花ざかり

花見にもたませぬ里の犬の聲

湖上の花

花に今眼入けり志賀の浦

立枯の残り多さよ花の中

田上の尼へ花見にまねかれて

海を見る目つきも出す花の雲

山深く分入りて

木の空の天狗も今は花の友

南都の般若寺にて

散こもる花や般若の紙の間
散錢も用意顔なり森の花
花雪とちらすや錢の間の山
朝ざくら芳野ふかしや夕櫻
一むしろちるや日うらの赤椿
手一ぱいゆすのかるたや躑躅山

〔ゆすのかるた〕はウンス
ンカルタの轉訛ならん。

閑居

山藤のもとのゆがみを机かな
藪の根やあけてゆり出す茶つみうた
百姓も麥にとりつく茶摘歌

〔この句「猿蓑」には夏の部
にあり。〕

翁の身まかり給ひし明る年の
春義仲寺へ詣て

石塔もはや苔つくや春の雨
三月と文に書のも名残かな
參宮の折奉納の心な

神風の彌生はふかし門の竹

夏

郭公なくや雲雀と十文字
うかれ出て山がへするか子規
兄弟が顔見合すやほととぎす
心なき代官殿や時鳥
吉野にて逢れう物かほととぎす
横雲の間や山出しの郭公
ほととぎすきのふ一聲けふ三聲
うぐひすもや受太刀や時鳥
明くれの空啼ひらけほととぎす

西山へまかるとて

新足に聞や内野ゝ子規

熊野にあたしか（南牟婁郡新

鹿村）といふ所あり初音をき

きて

こちの身もあたしかに聞郭公

伊勢にて

卯の花も海のかざりや朝熊山

うの花の絶間たゝかん闇の門
巡禮のころ

卯の花に笠摺寒し初瀬山
光りあふ二ツの山の茂りかな
色くくの作となりけり麥のあと
つかみあふ子供のたけや麥畑

（この句『猿蓑』『去來抄』共に
に游刀の句とす。）

朝くくの葉のはたらきやかきつばた
舟乗の一濱留主ぞけしの花
熊野路にしる人もちぬ桐の花
元祿七年久しく絶たりける祭
の行れけるを拜して

酔顔に葵こぼるゝ匂ひかな
竹の子や島隣に悪太郎

武士の子の生長をいふて

笋の時よりしるし弓の竹
湖の水まさりけり五月雨
たまぐに三日月拜む五月かな

大和紀伊の境はてなし坂にて、

往來の願證なとめて奉加す
すめければ、料足つゝみたる
紙のはしに書付ける。

つゞくりもはてなし坂や五月雨

雲とりの時にて

五月雨に沈むや紀伊の八莊司

曲水子にいざなはれて勢田の

蟹見にまかりけるに、夕べの

程流れにつゞきて下りぬと語

れば、繪舟をさし下して

ほたる火や黒津の梢兒が嶋

螢火や吹とばされて鴉の闇

（『猿蓑』に「膳所曲水の樓に

て」と前書あり）

妹千子身まかりけるに

手の上に悲しく消るほたるかな

水札啼や懸浪したる岩の上

鶏もはらく時か水鶏なく

石垢になを喰入るや淵の鮎

見物の火にはぐれたる歩行（かちう）鵜哉

旅寝して香わろき草の蚊遣かな

木津へまかりて

山里の蚊は晝中に喰ひけり

其角の母の悼に

蚊遣にはなさて香たく悔かな

青柴を蚊帳にも釣や八瀬大原

谷汲寺にて

順禮もしまふや襟に鮭の飯

すゞしさや浮洲の上のさくらべ

立ありく人にまぎれて涼かな

涼しさよ夕立ながら入日影

町すじは祭に似たり夕すゞみ

更る夜を隣になろふ納涼哉

猫の子の巾着なぶるすゞみかな

紀伊の藤代を通りける頃、此

所に三郎重家の末今にありと

聞及びぬれば、導入侍りしに、

門築地押廻し、倒たる馬、み

がき立たる矢の根立がざりて

いみじき武士なり。また庭に

いにしへの弓掛松として古木今

藤しろやこひしき門に立すゞみ

洛東眞如堂にて善光寺如來閣

帳の時

すゞしくも野山にみつる念佛かな

夕すゞみ痴氣起して歸りけり

じだらくに寐れば涼しき夕かな

(この句『猿蓑』『去來抄』共

に宗次の句とす。)

葬の二葉にうくる暑かな

石も木も眼に光る暑かな

美濃の國熊坂が人見の松にて

わるあつく吹や人見の松の風

住かへよ人見の松の蟬の聲

同じ國にて

夏かけて眞桑もみへぬ暑かな

葉がくれをこけ出て瓜の暑かな

暮まつや藪のひかへの雲の嶺

夕ぐれや元ならびたる雲のみね

伏見の舟中より都の方なが

めて

夕立の雲もかゝらず留主の空

六玉川の記あり

(伊丹の百丸の需によりて

綴りし記文なり)

六玉川高野ゝ外は清水かや

鎧着て疲ためさん土用干

水無月の竹の子うれし竹生嶋

從兄弟の筑紫より上りけるに

むかし思へ一ツ畑のふり(瓜)茄子

夕顔や名を落したる花の形

酒堂が難波に居を移せし時

門竇も聲自由なり夏ざかな

秋

蛭ならぶはや初秋の日數かな

(この句『陶蘭集』には野童

とす。)

うちたゞく駒のかしらや天の河

酒盛となくて酒のむ星むかへ

筑前の黒崎にて、明日は此邊

リのたゞも沖に出て雨乞の
踊し待るといふを聞て

七夕をよけてやたゞが舟踊

たゝとは、此邊にて漁父の

妻娘の事也。けふは七月七

日の事にぞ待りける。

黒崎砂明亭にて

うちつけに星まつ顔や浦の宿

魯町が許にて

山本や鳥入り来る星むかへ

魂棚の奥なつかしや親の顔

妻におくれたる人の許にて

寐道具のかたゝやうき魂まつり

年經て長崎に歸りけるに

見し人も孫子となりて墓参り

踊子よ翌は畑の草ぬかん

朝顔や夜は葎の博奕宿

秋の日のかりそめながらみだれけり

初露や猪の臥芝の起上り

露落て尻こそばゆき木陰哉

悼風國一

朝夕にかたらふものを袖の露

嵐蘭追悼

千貫の剣うめけり苔の露

遊女常盤身まかりけるをいた

みて相しれりける人に申侍る。

露けぶり此世の外の身受かな

芭蕉翁の奥の細道を拜してそ

の書寫の奥に書付ける。

ぬれつ干つ旅やつもりて袖の露

稻妻のかきまぜて行闇夜哉

長崎丸山にて

いなづまやどの傾城とかり枕

都にも住まじりけりすまひとり

浅茅生やまくり手下す虫の聲

早稻ほすや人見えむる山のあし

田上にて

山家にて魚喰ふ上に早稻のめし

こけ様にはうと抱つく西瓜かな

尻撫て馬飛するな花すゝき

ひみといふ山にて卯七に別る
るとて

君が手もまじる成べし花すゝき

岩端や爰にもひとり月の客

盲より啞のかはゆき月見かな

名月や縁とりまはす黍のから

名月や海もおもはず山も見ず

月見せん伏見の城の捨郭

名月やむかひの柿屋照さるゝ

乗ながら馬草はませて月見かな

黒い身に照こむ旅の月見かな

誰ゝも東向らん月のくれ

猪の寝にゆく方や明の月

暗帳に小屋作りて折ふしに休

息仕いなれば

月のこよひ我里人の蕪うたん

世波にたゞひて日ぐれの頃

岡崎より京に歸るとて

鴨川や月見の客に行あたり

長崎素行亭

浦人を寐せて海みる月夜かな

長崎より田上に旅寐うつしける時

名月やたが身にせまる旅ごころ

閑木の宿にて小姫のまだらぶしうたふを聞て

月かけに裙を染たようらの秋

中秋の蛸蜘蛛を詮罪して

かゝる夜の月も見にけり野邊送り

長崎諏訪の社にて前書あり

尊とさを京でかたるも諏訪の月

十六夜やたしかにくるゝ空の色

駒牽の木曾や出らん三日の月

海山を覺へて後の月見かな

幸府奉納

幾秋の白毛(髪)も神の光かな

いづのへ一戸や衣もやぶるゝ駒むかへ

乗掛の眠をさますきぬた哉

娘より嫁よりよはき砧かな

〔「去來抄」に中七「嫁の音

弱き」とあり。〕

あき風やしら木の弓に弦はらん

秋風に耳の垢とれわたし守

吉備津宮奉納

秋かぜや鬼とりひしぐ吉備の山

臥所かや小萩にもるゝ鹿の角

小男鹿や岩に踏ばる雲のすき

啼鹿を椎の木の間に見付けり

夜あらしや空に吹とる鹿のこへ

おく山や五壁つゞく鹿の聲

伊都岐島にて

みつ潮の岩ほに立や鹿の聲

浦陰や通しも交るわたり鳥

朝あらし天窓の上を渡り鳥

長月のすゑ筑紫より上りける

道安齋の廣嶋を過けるに、人

ふゝとらへけれども、故郷に

心いそぎせられてのがれいつ

る曉、一夜の宿に書とどめ侍

けふ翌と成ていそがしわたり鳥

長崎に旅寐のころ

ふるさとも今はかり寐や渡りどり

雁がねの竿になる時猶さびし

筑前の國にて

福岡や千賀もあらはに鴈すゝき

同黒崎にて

氣遣ふてわたる灘女や鰯つり

〔「江だめ」は漁船の一種也〕

先放をあくの浦に訪ふ。

八月や潮のさはぎを山かつら

田家

聞まいといふか案山子の腰刀

有磯海集撰給ひける時入句と

も書あつめ参らせけるに添て

祝す。

鶯の巢や野分にふとる有磯海

松茸や人にとらるゝ鼻の先

老て神職かふむりたる人を賀して

花も實も晚稻に多し神の秋

難波津にて

芦の穂に簪うつかたや客の膳

園女亭にて先師の事ども申出

ける序に

秋はまづ目にたつ菊の苔かな

菊咲て屋根のかざりや山畑

筑前博多にて

菊の香にもまれて寐ばや濱庇

自題落柿舎「落柿舎記」一

篇『風俗文選』にあり

柿ぬしや梢はちかきあらし山

落柿舎感偶

柿買や見ればぬいたる眞桑實

芽立より二葉にしげる柿の實

と丈草申されしも、いつの頃

にや有けん。彼落柿舎もうち

こぼつよし。

『小文庫』には「丈草」の

二字なし。

長蛇にて支考に逢て京の事な

どたづねられて

息才の數に問れん嵯峨の柿

木のもとに圓坐とりまけ木練どし

周防にて

徳山の蕎麥白たへや綿もふく

唐人の枕とて故郷にて人のく

れけるに

囉へどもまづ此秋はかり枕

鼠の説『華摘』に文章あり

面扶持をへつるか栗の鼠ども

願甲陽軍鑑一

あら蕎麥の信濃の武士はまぶし哉

長き夜も旅草臥に寐られけり

聖護院にて

樗の木の色もさめるや秋の空

うき人をまた口説みんあきのくれ

冬

萬の羽もかいつくろいぬ初しぐれ

かはらけの烏帽子の上や初時雨

柳など天窓は寒き初しぐれ

いそがしや沖の時雨の眞帆片帆

一時雨しぐれて明し辻行灯

こがらしの地にも落さぬしぐれかな

しぐるゝや紅の小袖を吹かへし

雲よりも先にこぼるゝ時雨かな

山雀の里かせぎするしぐれかな

塗物の上にちよぼくしぐれ哉

食時にさしあふ村の時雨かな

翁の病給ふを聞て伏見より夜

舟に寐て荷物の間や冬籠

翁の病中

白粥のあまりするやふゆごもり

看病も一人前の火燵かな

『綴有確海』に「病中吟」と

題して、上中を「介病も一人

前なる」としたり

眞夜中や火燵際まで月の影

翁の病中新歸の句

木がらしの空見直すや鶴のこへ

傷亡師終焉

わすれ得ぬ空も十夜の泪かな

丈草の許より、芭蕉翁の七日

くとうつり行あはれさ猶無

名庵に偶居して心地さへすぐ

れずとて、朝霜や茶湯の後の

薬鍋といへるかへし

朝霜や人參つんで墓まいり

翁三回忌に義仲寺にて

夢うつゝ三度は袖のしぐれかな

行かゝり客に成けり蛭子講

木曾墳に参りて

船馬にまた泣よるや神無月

松本にて

初雪や四五里へだてゝ比良の嶽

應くといへどたゞくや雪の門

せめよせて雪のつもるや小野の嶺

雪の山かはつた脚もなかりけり

九重に見なれぬ雪の厚さかな

詠やる奥のとうくや比良の雪

旅人の外は通らず雪の朝

繪の中に居て見る雪の山路かな

雪空や鬼も腕を出すべし

悼浪化君

その時や空に花ふる野邊

暖簾や雪吹わたす旅

軍書を讀て

雪降れば常盤御前の最惜しき

ひつかけて行や雪吹の豊嶋御座

松杉にすぐひ上たるみぞれ哉

老武者と指やさゝれん玉あられ

防僧丈草

馬道や菴をはなれて霜のやね

山畑や青みのこして冬がまえ

墨染に眉のて

卯七亭

霜月や日まぜに

其角へかへし

放すかと問るゝ家や冬籠

賀二楓波山撰集

木がらしや剣をふるふとなみ山

夕陽くひらつく磯のかれ葉哉

冬の木の間の間現ん賣屋敷

布子れて淋しき顔や神送り

鴨なくや弓を捨て十五年

尻頭し心もさき生海鼠かな

そのうゝ飄々見せよ鉢たゝき

物ゝも立す鉢たゝき

箒も見せん鉢蔽

十鉢を投じて百摩の風を聞し

し

の馳走にうれし鉢たゝき

槽の火に親子足さす佗寐かな

懐僧丈草

寒き夜や思ひつゞける山の上

堀川を通りて

有明にふり向がたき寒さかな

火いけ虫背戸から寒し籠の前
李下が妻の身まかれるに

寐られずやかたへ冷ゆく北下し
盗人におひともいはん鰻の錢
御神樂や火を焚く衛士にあやからん
老樂の口もと塞し御佛名

廣澤

池の面雲の氷るや愛宕山

除風子の撰集を説ひ發句參ら

せんとおもふに、青むしろは

ことしの藁をもて織出たる物

なりと人の申ければ、かなら

ず冬季なるべしと沙汰し侍り

て

草庵に一の竇や青むしろ
くれて行年のまうけや伊勢熊野

行年に疊の跡や尻の形
うす壁の一重は何かとしの宿
としもはや牛の尾ほどのたより哉
神鳴もさはぐや年の市の音
長崎の浦に旅寮して

年浪のくよりて行や足の下
としの夜の鱒や鯛や三の膳
年の夜や人に手足の十ばかり

追加

青柳や覆ひかさなる糸ざくら
十五夜の月のひらきや前うしろ
日和見る窓にはちかし月の暮
牛賣て伯父と道きるしぐれ哉